

「言葉屋」第5巻は書き下ろしで単行本になります。2月20日発売予定。お楽しみに！

言葉屋

5巻

いろは暗号歌

作・久米絵美里
絵・もとやまさこ

「そもそも言葉のシステムは、おかしい」
詠子の中学に入って初めての春休みは、詠子のそんな一言からはじまった。

「え？」
厳しい顔をして、口元に手をやり考えこんでいる詠子に、詠子は間のぬけた声を返す。

「確かに意味を持たないそのふにやりとした音は、このなにもかもがきちんとした空間にはあまりに不つり合いで、声自体が自分の存在を恥じているように、すぐに空気にとけて消える。」

「ここは、喜多方屋の店内。詠子のおばあちゃんと同じ、言葉屋を営んでいる詠子のおじいさんとお父さんのお店だ。詠子たちの春休み初日は、喜多方屋の定休日にあたり、詠子たちは、喜多方屋の店内を会議室としてつかわせてもらっていた。」

会議。
春休み、これからの言葉屋について考える会議をしようと言いだしたのは、詠子だった。三学期の期末テストが終わるやいなや、詠子は有無を言わさぬ強い口調で詠子を誘った。先日、詠子とともに、とあるグループディスカッションに参加した詠子は、会議の楽しさに目覚め、会議をしたくてしかたない病にかかっていたのだ。これからの言葉屋を担っていく言葉屋の子同士、言葉屋の問題点について話し合い、将来的には新商品の開発をしよう、そのためには会議が必要だと、詠子はここ最近、ずっと言い続けていた。そして、宿題がほとんどなく、お互い旅行に行くこともない春休みは、その会議にびったりの時間だったのだ。

詠子も、会議をすること自体には大いに賛成だった。言葉屋という奥の深い職業について、改めて考えたいと思っていたし、それをいっしょにできるのは家族以外では詠子だけだ。

ただ、そんな詠子の誘いに、詠子がうなずけなかったことにはわけがあった。詠子からのプロポーズを、詠子はつい三

中学に入って初の春休み。言葉屋に大事件が起きた……

か月前に断ったばかりだったのだ。自分には好きな人がいるから受けられません、と、詠子は文化祭が終わって少しして、はつきりと詠子に伝えた。

しかし、詠子のその言葉を確かに受け取ったはずの詠子の瞳は、ちっともゆるがず、詠子を見つめたまま言った。

「わかった」
好きな人とは誰か、脈はあるのか、どうしへ

「システムがおかしいって……どうして？」
会議初日が、言葉屋の基本的なアイテムのひとつである言葉へのダメ出しではじまっ

「自分でではダメなのか。詠くんは、頭に浮かんでいそうなそんな質問をひとつもすることはない。ただ詠子の言葉を受け取っただけだった。詠くんが話を広げない以上、詠子の方からもそれ以上はなにも言えなくて、それから三ヶ月、詠子と詠くんはそれまでどおり、変わらずに過ごした。

「でも会議、できそうな場所ってあるかな」と、不安げに口にした詠子に、
「うちでやればいいよ」

「と答えた詠子に、「うち？」と警戒してしまった自分もとても恥ずかしかった。
「そう。ほら、うちならガラスばり外から丸見えだし、ふたりきりって感じしなくて、詠子も安心できるだろう？」
そう言った詠子の顔は、詠子からかうように少し笑っていて、それで詠子はますます恥ずかしくなって、

「わかった、じゃあ、詠くんのおうちのお店で」と、「お店」の場所を強調して、会議への参加の意思を伝えたのだ。

そこで、話は冒頭にもどる。会議の初日に、詠くんは言ったのだ。

「システムがおかしい、と。
たはすの詠くんの瞳は、ちっともゆるがず、詠子を見つめたまま言った。
「わかった」
好きな人とは誰か、脈はあるのか、どうしへ

「自分でではダメなのか。詠くんは、頭に浮かんでいそうなそんな質問をひとつもすることはない。ただ詠子の言葉を受け取っただけだった。詠くんが話を広げない以上、詠子の方からもそれ以上はなにも言えなくて、それから三ヶ月、詠子と詠くんはそれまでどおり、変わらずに過ごした。

「でも会議、できそうな場所ってあるかな」と、不安げに口にした詠子に、
「うちでやればいいよ」

「うん……でも、その『そうそうない』ことだからこそ、必要な時はよほどの事情があるわけで、そういう事情がある人たちにとっては、言葉はやっぱり救いなんじゃないかな」
詠子はこれまで、自分が言葉をわたりた人たちのことを思い、願うように、しかし、弱々しく言葉を言ってきた。自信のなさ、声のボリュームをまよわせた。

対し、詠くんの声は安定している。言葉のひとつひとつが、奇策を探して指さされる将棋かチェスの駒のようだ。

「もちろん、言葉を全面的に否定しているわけじゃない。ただ、なんていうか今の時代に合っていない……いや、足りないんだ。言葉を思いついでから、まよって、口にしてはいけないと決心して、言葉を探して、封じる、その流れに乗るには現代人はあまりにいがしすぎる」

「かと言って、必要な時にそなえて、世界中の人が非常用の言葉を常に持ち歩いているの……」
「うん、ちがう。言葉はそんな気軽なものであつちやならないし、封じたい言葉に合ったものををつかかなきゃ、十分に力を発揮できない」
「つまり、今、詠くんが言った問題を解決するためには、過去の言葉を封じられる新しいタイプの言葉をつくらなきゃならなくて、そうすれば現代で悩んでいるたくさんの人たち

を助けられる……」
お互いの言葉のはしとを結ぶように話を続けていた詠子たちは、そこで、うーんとだまりこむ。そしてしばらく、ふたりでつくったその長い言葉のロープの強度を確かめるように、互いの中でそのロープを引っ張る時間をとった。

「無理だよなあ……」
沈黙をやぶった詠くんのその一言で、ロープの結び目はすべてするんとほどけてしまふ。そして、眉を八の字にした詠子も、その結び目を復活させることはできなかった。
「だよなあ……過去の言葉を消すことは、それにまつわる記憶も消すことで、でも、『今』は過去の記憶が全部なくなってしまう。きてるわけだから、それを全部消すことは一から『今』をつくりなおすことになるわけ……」

詠子の言葉は結び目をつくるどころか、一本で勝手にこんがらがらる。
そして、詠くんは詠くんで、
「要はタイムスリップができればいいわけで、タイムマシンをつくれれば、その人はその人のパラレルワールドで幸せになれなくもな

「と、まじめすぎて、詠子には追えないおかしな迷路に入ってしまった。
ただ、迷路はすぐに行きづまりになったように、詠くんはすぐにもどつてくる。
もどつてきて、詠子の目を見た。
「とにかく俺、今の言葉屋のあり方には疑問を感じてるんだ。新商品の開発も、ただやみくもにするんじゃない。いや、今だけじゃなくて、これから長く人の生活を支えていけるもの、言葉や言葉のクラス、言葉屋の基本となる商品にできるものにしたんだ。その

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

「語！たいへんだ！」
前ふれもなく、詠子と詠くんが向かい合つてすわっていたお店のカウンターの横のドアがいきおいよくあいて、はじけるような声が飛びこんできた。

言葉屋 いろは暗号歌

言葉屋で同級生の詠くと「言葉屋会議」を始めた矢先に、事件の知らせがとどきます。ある言葉をねらった「秘密あらし」が現れて、詠子たちは犯人をさがすため、暗号解読にいどみます！ 言葉屋シリーズ初の長編。

全320ページ ハードカバー 2月20日発売
定価1100円＋税 ISBN 978-4-909064-30-1

著者 久米 絵美里
1987年、東京都生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒。「言葉屋」で第5回朝日学生新聞児童文学賞を受賞、「言葉屋 言葉と音のひみつ」でデビュー。

絵 もとやまさこ
1982年、神奈川県生まれ。武蔵野女子大学文学部日本語日本文学科卒。イラスト・書籍の挿絵などで活動。主な作品に詩集『夏の日』『ゴムの木とクジャ』『ぜいたくなあさ』（銀の鈴社）など。

【既刊】
言葉屋 言葉と音のひみつ（第1巻）
言葉屋 ことのは言葉のつくり方
言葉屋 名前泥棒と論理魔法
言葉屋 おそろい心とすれちがいDNA